

2018（平成 30）年度 京都大学 入試問題 理系 第 2 問 解答例

問一

科学は、個人的体験を言葉等の方法で表現、記録し、他者も感覚しうる広義の事実に至るまで客観化するに至ると、自己の体験の忠実な表現が本領の文学に酷似すると思われるから。

- * 主題「科学」と限定条件（指示内容）「この辺までくると」の内容は必須要件。
- * 「はっきりとはきめられない」ことの理由説明であるから、「明白に区別できないから」といった、よくあるトートロジータイプの誤答に陥らないよう注意すること。

問二

芸術的価値の本質は、個人の貴重で絶対的な生の体験にあり、科学の抽象化の過程で脱落を免れないと思われるから。

- * 単なる「芸術的価値」ではなく（それは多様である）、「芸術的価値の本質」である。
- * 「生き生きした体験の内容」が解答の必須要件。

問三

抽象化、客観化しうる諸事実を確認し、相互比較して共通性や差異を発見し、それらの関連を表す法則の定立へと自己発展を続ける科学の本質により、人間の他の諸活動が根ざす多くの貴重で絶対的なものを見逃す不可避の必然性。

- * 「本質」の説明は、傍線（１）の前からだけではなく、後からも十分広くとらえたうえで、簡潔にまとめたい。
- * 最終段落の最終センテンス（出題者による結びである！）をどう活用するかが難しい。方向性が逆だからである（「弱点」というより「長所」でもあるとされている）。難しければ無理しなくともよいが、解答に「人間の他の諸活動」を適切に活用できれば加点要素がアップするであろう。